

# 自閉症スペクトラム障害児における皮肉理解の特徴

～皮肉の理解能力についての年齢縦断的検討及び表情理解能力との関連に注目して～

○土屋勇太<sup>1)</sup> 平田正吾<sup>2)</sup> 奥住秀之<sup>3)</sup> 国分充<sup>3)</sup>

1) 山梨県立ふじざくら支援学校 2) 茨城キリスト教大学 3) 東京学芸大学

KEY WORDS: 自閉症スペクトラム障害 皮肉理解 表情理解

## 【目的】

土屋ら(2016(1))は、重篤な知的障害のない自閉症スペクトラム障害(ASD)児を対象として、臨床的には彼らが困難を示すことが多いとされている比喩や皮肉といった間接表現の理解能力の実態について検討した。その結果、ASD児においては皮肉の理解に困難を示す児が多いことに加え、こうした皮肉理解の困難は、児童顔における表情の理解能力が低い児ほど著しいことが明らかとなった。土屋ら(2016(1))では、ASD児の表情理解能力を、小松ら(2013)の表情認知検査を用いて評価した。この検査では様々な表情の児童顔に対して最も当てはまる感情語を選択することが求められるが、土屋ら(2016(2))では、これとは異なる方法でASD児の表情理解能力を評価した場合にも、皮肉理解との関連について同様の結果が得られるのか検討した。特定の表情の成人顔をGo刺激としたGo/No-Go課題(表情GNG課題)を用いた検討の結果、本課題の成績と皮肉理解の関連は明確でなく、ASD児における皮肉理解の困難が、必ずしも表情刺激の検出困難と結びつかないことが明らかとなった。しかし、ここで実施した表情GNG課題は、表情No-Go刺激として特定の感情を示していない成人顔しか用いておらず、表情Go刺激が検出しやすくなっていた可能性も考えられる。それでは、表情No-Go刺激の種類を増やしたGNG課題(以下、複雑表情GNG課題)で測定を行った場合、皮肉理解との関連はどのようになるのだろうか?本研究では、この点について検討する。これに加え、本研究ではASD児における皮肉の理解能力の年齢縦断的測定の結果についても併せて報告する。これはここまでの一連の検討において、同一の児に対して繰り返し皮肉の理解能力を評価する課題を実施してきたが、その成績に変化が生じているのか未だ検討していないことに加え、同様の検討もこれまでにほとんど行われていないことから、その資料的価値は高いものと考えたからである。

## 【方法】

1) 対象児 暦年齢8～19歳のASD児17名(男14名、平均13.8±3.6歳)。対象児全員に重篤な知的障害はなく、また書字理解に明らかな問題は認められない。

2) 皮肉文テスト 安立ら(2006)で使用された間接表現文の内、皮肉文5問を実施した。対象児は、登場人物が皮肉を言うストーリーを読んだ後に、その話者の意図に最もよく当てはまるものを5つの選択肢の中から選ぶよう求められる。全5問における正答数を対象児の成績とする。本課題は、これまでに3回実施されており、1回目の測定は2015年6月、2回目は2016年3月、3回目は2016年7月に実施された。

3) 複雑表情GNG課題 成人男性と女性がある特定の一つの感情を示している顔画像4種(喜び、怒り、悲しみ、驚き)の内一つを表情Go刺激、それ以外の顔刺激を表情No-Go刺激とした。1ブロック全32試行の内、8試行を表情Go刺激、24試行を表情No-Go刺激とした。いずれの刺激も男性と女性の画像が半数ずつ含まれている。対象児

は、眼前の画面に表情Go刺激が呈示された場合のみ反応ボタンを押すよう教示される。各刺激の呈示時間は最大500ミリ秒であり、反応ボタンが押されるか500ミリ秒が経過した場合、次の刺激が呈示される。各刺激に対する反応の有無と反応時間をSuper Lab(Cedrus Inc)により記録した。各表情刺激をそれぞれ表情Go刺激とした全4条件で測定を行い、表情Go刺激全体についての正反応率と正反応時の反応時間を分析の指標とする。

## 【結果と考察】

### 1) 皮肉の理解能力についての年齢縦断的検討

ASD児に実施した全3回の皮肉文テストの成績の推移を個別に検討したところ、全ての児でその成績に明らかな変化は生じておらず、練習効果が認められないことが明らかとなった。

### 2) 複雑表情GNG課題と皮肉理解の関連

土屋ら(2016(2))と同様に、皮肉文テストの正答率が100%であったASD児5名を「皮肉良好群」(平均17.2±3.2歳)、それ以外の者達12名を「皮肉困難群」(平均12.4±2.8歳)として分類した。表1は、皮肉文テストの成績によって分類されたASD児2群における複雑表情GNG課題の成績を示したものである。

表1 ASD児各群における複雑表情GNG課題の成績

	正反応率	反応時間(ミリ秒)
皮肉困難群	26.6±17.1	456.7±17.9
皮肉良好群	19.4±21.8	450.6±9.5

表より、ASD児2群の成績に明らかな違いは認められないことが分かる。ASD児各群を要因とした1要因分散分析を行ったところ、正反応率についての主効果は5%水準で有意でなく( $F_{1,15}=0.5, p>.05$ )、反応時間についてもその主効果は有意でなかった( $F_{1,15}=0.3, p>.05$ )。こうした結果は、先行研究と同様にASD児における皮肉理解の困難が、表情刺激の種類を増やした場合にも、表情刺激の検出困難と結びつかないことを示すものである。ただし、両群における正反応率がそれほど高くないことは、今回適用した最大500ミリ秒という刺激提示時間の短さが、この年齢層には適当でない可能性も示唆しているように思われる。今後はこの点にも留意しつつ、児童顔を刺激とした複雑表情GNG課題を実施した場合にも、今回と同様の結果が得られるのか検討していく。

付記:本研究への参加及び発表に関する同意は対象児の保護者より得ていると共に、研究実施機関の倫理委員会の承認を得ている。

文献 1) 安立ら(2006). 脳と発達, 38, 177-181. 2) 小松ら(2013). 子ども版表情認知検査. 3) 土屋ら(2016). 東京学芸大学紀要総合教育科学系II, 67, 179-185. 4) 土屋ら(2016). 日本特殊教育学会第54回大会ポスター発表. (TSUCHIYA Yuta, HIRATA Shogo, OKUZUMI Hideyuki, KOKUBUN Mitsuru)